

# インドネシア、ミャンマー、タイを訪ねてみて思ったこと 熱く誠実で日本を面白くしてくれる人たち

建設現場で、コンビニで、飲食店で、いろいろな国の人たちの顔を見るのはもはや日常だ。そういう意味で、日本、とくに都市部はかなりグローバル化が進んだ。本場な人びとはつまり、そこかしこにおいて、この国に新風をもたらしている。

文筆家

## 加藤ジャンプ

●かとう・ジャンプ 1971年東京生まれ。横浜、ジャカルタ、ジョグジャカルタ、クアラルンプールなどで育つ。著書に『コの字酒場はワンダーランド』（六耀社）、ドラマ『今夜はコの字で』の原作者。

### 【第一話】

横浜から十五分のインドネシアにたいへんなビジネスパーソンがいた

雑居ビルの四階でエレベーターを降りると、いきなりインドネシアなのであった。

いつまでも工事中で、何年たっても完成しない横浜駅は、サグラダフ

アマリアと呼ばれていたが、どうも完成したらしい。らしい、というの

は、実際に横浜駅に行ってみると、大き過ぎて結局どこからどこまでが駅なのかよくわからないからなのである。横浜駅は液体のようで、全体にべろーんと空間を埋めていて「なんとなく横浜駅」な領域が広がっている。で、「なんとなく横浜駅」の外側はというと、一部、ハマグリ

のかもしれない。

その「本場」も、このリアル横浜エリアのなかにある。東急東横線の各駅停車で一駅。反町駅は、横浜駅から歩いて十五分ほどである。横浜駅から結構な坂道を延々歩くことになるが、横浜はどこでも坂だらけなので、とりたてて珍しいことではない。

いだ。

反町駅は東横線のなかでは最も乗降客が少ない駅で、一日一万二千人ほどが利用している。横浜駅から一駅なのに東横線で一番乗降客が少ないのは、たぶん、駅近くに巨大マンションなどが少なくして住民がそこま

で多くなく、かといって大量の従業員が行き来するような会社も少ないからなのだろう。いつも反町駅を出ると、やけに落ち着いた気持ちになるのだが、過度に開発されていない、街らしい街の顔が維持されているせ

改札を出てしばらく歩くと、六階建てのビルがある。六階建てだが、エレベーターはガラス張りの展望タワーで、私は従前から「反町のスクエアビル」と呼んでいる。本家スクエアビルは姿を消したが、反町のそれはばっちり現役である。ちなみにビルの本当の名前は「クロスロード反町ビル」という。ビルの一階、雑居ビルにありがちな集合看板の一つに、

『Indonesian Cafe Dapoer  
Koneng』

と、書かれたものがある。日本語の表記は一切ないからアルファベットに馴染みの無い人には読むことができない。看板には、絵も描かれていて、ポウルと唐辛子と地図がある。ピクトグラムとしては十分だ。

インドネシア、料理、辛い、と理解できる。  
一階でエレベーターに乗り込む。ガラス窓の向こうに通りと街が見える。盛り場の香りがするエレベーターである。

四階に着いてエレベーターのドアが開くと、薄暗い階段と廊下が目にはいつてくる。すぐ傍らにドアがあつて、そこはインドネシア雑貨の店。横浜では初のインドネシア雑貨店だという。もちろん日本語は聞こえてこない。面白そうな物が並んでいる。

あとで面白い物に行くこととして、さらに奥へと入っていくと、細い廊下がのびており、その壁に Dapoer Koneng と書いた看板がある。

ガラスが嵌められたドアを開けて店に入る。すると

「あ、加藤さんですか」

鮮やかな黄色のTシャツを着た女